



OHARA サポーター倶楽部会報

丸窓

[第20号] 令和元年12月

《掲載情報》

- ・後援会活動報告
- ・会員紹介
- ・メッセージなど

発行:大原美術館後援会事務局

後援会活動報告

大原美術館後援会 感謝と親睦の夕べを開催しました！

開催日:2019年12月6日(金) 会場:大原美術館 本館

今年は法人会員20社33名、個人会員68名のみなさまがご参加の「感謝と親睦の夕べ」——第1部では、開会挨拶として、高階秀爾館長と和久井康明後援会会長より、日ごろのご支援への感謝を申し上げました。

次に森川政典副館長兼後援会事務局長より、この1年間の後援会活動に加えて、美術館の取組みとして、ファジアーノ岡山との連携協定、岡山フィルハーモニック管弦楽団(弦楽五重奏団)の協力により音声ガイドで鑑賞中に音楽も聴いていただけたようになった事や、法人会員の丸五ホールディングス株式会社創業100周年を記念した事業協賛などをご紹介しました。

なお今回、丸五さんのご厚意で、この協賛のひとつ、周年記念ロゴが印刷されたモネ《睡蓮》のクリアファイルを、ご参加のみなさまにプレゼントしました。

続いて柳沢秀行学芸課長より、展示室の照明器具導入を例に、後援会支援のおかげで、設備の改修改善ができていることに御礼を申し上げました。特に本館第1室は、新しい照明でがらりと展示室と作品ひとつひとつの印象が変わっています。ぜひ実際にご覧ください！

第2部では、東京大学東洋文化研究所教授で、大原美術館理事でもある板倉聖哲(まさあき)先生に、「宮女図」と「五牛図」一大原孫三郎・總一郎の中国絵画への眼差し』と題して講演をいただきました。

最初に「大原美術館は泰西名画が有名ですが」と前置きして、大原家と大原美術館が所蔵する中国、日本の絵画を紹介。ちなみに児島虎次郎も中国風景を描いており、それら作品には、歴史的な、あるいは同時代の中国絵画と南画の影響が見受けられるものもあるそうです。

そして、タイトルの2作品について、「中国で13世紀に描かれたもの」と「古(いにしえ)に倣って描かれたもの」というふたつの共通点を指摘。それを軸に、他の伝統的な中国絵画と比較しながら丁寧に見どころを解説してくださいました。「宮女図」は「男装の麗人」、「五牛図」は「ラブリーな表情」とユーモアたっぷりのお話に親近感を感じられました。ところで「五牛図」は北京の故宮博物院に、そっくりな絵画があるとのこと！しかも故宮所蔵作品は大変に有名だとか。「でも私は大原美術館のほうが好きです」と断言してくださいました。

ぴったり1時間の講演で、中国絵画への興味と愛着が深まったのではないかでしょうか。展示機会の少ない作品ではありますが、大原美術館のまた違った魅力を伝えていただきました。

第3部の懇親会では、例年より軽食にしたつもりが、倉敷国際ホテルさんの粋な計らいで、みなさま充分にご満足いただけたようです。板倉先生への質問も飛び交い、「久しぶり」、「初めまして」の会話もあちこちで聞かれました。

例年の12月らしく冷え込んだ夜でしたが、ご参加のみなさまは、ほっこりと温かい表情でライトアップされた大原美術館を後にされたと思います。今年一年も、本当にありがとうございました。



講演の様子



懇親会の様子



懇親会の料理

「倉敷、大原美術館の良さをもっと知ってほしい」今回は入会3年目、アテンダントスタッフとしても美術館の活動を支えてくださっている阪本真基子さんにお話を伺いました。



活動の様子



ボナール《欄干の猫》

倉敷市出身で大阪・東京へと居住地を移し、25年ぶりに帰郷した際あらためて倉敷の文化レベルは高いと感じました。2016年、チルミュの対話型ツアースタッフ研修に参加したことをきっかけに、アテンダントスタッフとしての活動をスタート。まさか自分が美術館と関わるとは思ってもいなかつたけれど、外資系の企業で男性顔負けにバリバリ働いていた営業マン時代は、生活がかさついていました(笑)が、美術と触れ合うようになり生活にうるおいが出てきました。また新しい発見もたくさんあるのだとか。毎週土・日に実施しているフレンドリートークでは、季節や観る人の気持ちで同じ作品でも見え方、感じ方がかわること、正解がなく多様性が認められるところなど、まさに今の時代にあるべきもの!と熱いお言葉をいただきました。

好きな作品をお尋ねすると、ピエール・ボナール《欄干の猫》がお気に入りとのこと。猫好きという理由だけでなく、不思議な世界感や日常的できどっていないところ、やわらかさを感じるところに惹かれるそうです。

いこうdeオオハラ企画のワークショップ“静かに香る鑑賞会～あなただけの香りのお守りを作ろう”でも、ボナールの作品で香りのお守りを作りましたとニッコリ。

「もっと早く出会いたかった、そして倉敷、大原美術館の良さをもっと知ってほしいです!」

学芸室より

大原美術館の保存・管理担当の若手学芸員より レンブラント《夜警》の修復を見てきました!

学芸員 塚本貴之



XRFの様子

レンブラント《夜警》の大修復プロジェクトが始まった!と、前号で紹介させて頂きましたが、実はその後9月末からちょうどオランダ・アムステルダムへ出張する機会があり、早速Rijks Museum(アムステルダム国立美術館)に見に行きました。

普段の《夜警》は、天井からの淡い外光が降り注ぐ専用の展示室で、堂々と多くの人々の視線を集めていますが、この時は左上の画像にあるように、額縁から外されたうえでガラスに覆われ、なにやら大仰な機械に囲まれています。よくよく説明を読んでみると、どうやら修復前の科学調査のようで、この時点では24時間のXRFを行っていたようです。

XRF(蛍光X線分析)とは、X線によって絵画に使用されている絵具の組成を分析するのですが、さすがにこの規模の作品となると機械も休む暇が無くなるようです…。

この様子は、現地でも多くの来館者の注目の的となっていましたが、RijksMuseumのHP(<https://www.rijksmuseum.nl/nl/nachtwacht>)でも進捗状況が動画で紹介されていますので、ご興味のある方は是非ご覧になってみてください。



XRFの様子(拡大)

メッセージ

新年を迎える大原美術館の兄弟姉妹達

名誉館長 大原謙一郎



2018年4月、大原美術館の川向こうに「大原本邸 語らい座」がオープンしました。江戸時代から活動の本拠であった本邸のなかで、多くの人で賑わっていた店や井戸端や裏路地や米倉の部分が、人々の交流の場として蘇りました。ここでは、若者達が集い語る様々なイベントが始まっています。

2019年夏には、倉敷民芸館が全国のお客様を迎える「日本民芸夏期学校」の会場となりました。また、秋は倉敷考古館が秋田県美郷町の「縄文の造形美と棟方志功」展に深く関わりました。大原美術館の兄弟姉妹達は、新しい時代の新しい道を模索しています。新しい年にも、大原美術館と兄弟姉妹達は、ともに、新しいチャレンジを続けます。これも全て、皆様の温かいご支援の賜物です。心から、御禮申し上げる次第です。

表紙の作品



富本憲吉《色絵四弁花文小筥》

h.9.3、15.5×8.8cm 磁器 1941年

「四弁花」は、富本の代表的模様である。模様の元となったのは、ティカカズラ(定家葛)というつる植物。夏場、さわやかな香りを放ちながら、小さく白い花をにぎやかに咲かせる。花の中心はほんのり黄色く、花弁はプロペラの羽根のように捻れている。

本来は五弁であるが、富本はこれを四弁に置き換え、連続模様とした。花弁の微かな捻れが規則的な模様の中に動感を生み、まるで風車が一斉に回っているかのようである。

大原美術館 〒710-8575 岡山県倉敷市中央1-1-15

TEL(086)422-0005 FAX(086)427-3677

<https://www.ohara.or.jp>

